俳諧　―　現代語訳　―

葉の落ちた木の枝に烏がとまっている。いかにも秋の夕暮れらしい景色である。

山路を歩いていると、ふと道の傍らにすみれの花が咲いているのを見つけた。その可憐で美しい姿を目にすると、私の心は何とはなしに引き付けられて、つい立ち止まって見入ってしまったことだ。

旅先で病に伏している。その夜々の夢に、寒々と枯れ果てた野末を旅行く自分の姿を見ることだ。

春の海を眼前に眺めると、海は大きな広がりをみせているが、そこでは一日中のたりのたりと波が上下して打ち寄せている。いかにものどかである。

五月雨が降り続き、水かさを増し濁流となってすさまじい勢いで流れる大河を前に、ただ二軒の家が不安げに寄り添うように建っている。

絢爛豪華に咲き続けた牡丹の花も散り落ちて、その花びらの二、三枚が黒い土の上に重なっている。

軽井沢の旅宿の早朝、有明の月が、まだ、淡く消え残っている頃、食膳についていると、浅間の山すそからわく霧が、部屋の中に煙のように流れ込んできて、食膳の辺りをはうようにしていることだ。

かねがね自分の最後の住みかと思い定めていた故郷へ帰ってきてみると、なんと五尺もの雪に深く閉ざされた世界である。見慣れている土地とはいえ、我が余生を送る土地かと思う

と、感無量である。

痩せ蛙よ、他の蛙との戦いに負けるな。一茶はここにいて、応援しているぞ。